
神なき世界の偽神伝

masker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神なき世界の偽神伝

【Nコード】

N2315X

【作者名】

masker

【あらすじ】

神として召喚され、神であることを求められた少年の物語。

1話 物語の始まりは、

小さな街の小さな教会。

暖かい日差しが降り注ぐ。今日も教会の屋根に寝そべって昼寝をする。下から聞こえてくる讚美歌は最高の子守歌。これに勝る幸せなんてどこにあるのだろうか、とは最近思えなくなっている。原因は美しい讚美歌だ。神々を讃え、感謝し、祈りを届けるための歌声。だが、既にこの世界に神々はいない。彼らの祈りはどこに向かうのだろうか…？などと小難しいことを考えているうちに、俺の意識は心地よい夢の中へ向かっている。

目が覚めたときには既に夜。明日はそろそろ仕事しないと。でももう遅いからな！。今日は家に帰ってもう一度寝て、明日こそ仕事だ！。…最近寝てばっかだな。

三ツ首の魔獣。 地獄の番犬。 冥府の呼び声。 すなわち、
ケルベロス。

数多い魔物の中でも、その凶悪性によって最も危険な一種に数えられている。出会えば逃げる事さえできない絶対的な脅威。対抗できるのは一流と呼ばれる探索者や騎士だけであろう。

俺はまさに今、そのケルベロスと対峙している。迷宮の奥底、おそらく安置されているであろう魔法具の番犬。舞台は寸分の狂いもなく石材が敷き詰められ、^は嵌め込まれて造りあげられた広場。広い場所はケルベロスの高い機動力を最も発揮できる。

だが俺に恐れはなく、むしろ対するケルベロスが警戒し、躊躇している。

「ケルベロス、恐れているな？本能で彼我の実力差を理解しているのだろう。賢い奴だ。だが見逃すことは出来ない。お前を倒さなきゃ最後の扉は開かないからな。」

そして俺は戦闘の開始を宣言する。

「行け、クローネ！ケルベロスを倒ぐふおっ！！」

「バカ！ケルベロスの前で突っ立ってるな、ご主人！！」

「バカ！主人の頭をど突くな、クローネ！！」

峰打ちでもすっごく痛いんだぞ。

俺の前に立つついでに刀の背で俺の後頭部を殴っていったのはまだ幼さすら残る少女。見た目は12歳くらい。彼女の身長に届くほど長大な片刃の剣を手に戦場を舞い、背中の中ほどまでかかる黒髪が風になびく姿は女神と見紛うほどだ。いつ見てもかわいいなあ。

などと見とれてる場合じゃない。俺自身もそれなりに戦闘技術は身につけているが、ケルベロスとの戦闘に巻き込まれたら10秒で消し屑にされる自信がある。戦場では俺の役目はクローネへの魔力供給でしかないのだ。そそくさと壁際に退避。1対1ならクローネがケルベロスに後れを取ることもないから、俺は魔力を送りつつ、既に観戦モードに入っている。

ほどなくして戦闘は終了。クローネは頬に小さなかすり傷を負ったくらいだ。

「お疲れ。さすがクローネ、少しくらいかすり傷がついてもかわいい。」

「そこは戦闘技術を褒めるところだと思っうが？」

「すまん、つい本心が出た。」

クローネを愛でるのは後にして今はケルベロスの処理を優先する。ケルベロスの毛皮は耐火性に優れ様々な防具に、魔力を帯びた爪と牙は攻撃魔法の触媒として重宝されている。もちろん他の部分も貴重な素材だ。

…ケルベロスの三ツ首を剥製はくせいにして部屋に飾るのもいいな。一般には悪趣味だと言われそうな趣味だが。とはいえ、最近は探索をさぼってたせいで金欠状態なので、今回は涙を吞んで残さず売り払う。次こそ剥製にしてやる。

いよいよ迷宮の最奥部、神代に作られた魔法具を安置する聖堂。今の時代でも使用できるものなら儲け物だが。ときどき保護魔法が掛けられてなく、老朽劣化でポロポロなものがあつたりする。

魔法具は魔力注入する事で作動し、強大な効果を発揮するが、それは基本的に一つの魔法具に一つの効果しかない。例えば剣や槍などの武器なら、注入した魔力の分だけ切れ味が増したり、使用者の間合いを読む能力を底上げしたりする、などだ。

ゆっくりと、聖堂の扉をあける。小さな部屋だ。装飾も少ない。

中央の台座に乗っているのは…扇あふぎ?手に取って観察する。うん、扇だ。

「クローネ、解析お願い。」

扇をクローネに渡してどんなものか調べてもらおう。

「……ん、確かに魔法具。どんな効果があるかは分からないけど攻撃性は感じない。」

「じゃあ試してみるか。」

扇を手にとつて集中、魔力を注ぎ込む。特に変化は見られない。

次、扇らしく煽あふいでみる。

「あ、風が冷たい。」

まあ、たいていの魔法具なんてこんなもんだ。一般の人でも使えるから売れないということはないだろう。いわゆる魔剣や魔槍は超レア物だ。なぜこれが大切に安置されているかは分からないが、ほかの魔法具も同じ。大した効果の無いものが大事にされてる。

「さて、帰りますか。」

迷宮の探索は終了。稼ぎも上々。明日は近くの街まで行って今日の成果を売り払えば金が入る。

なんて考えてる所で部屋に青い光が満ちる。

「何？何？何が起きた？」

「ご主人、転移式魔法陣だ。腹を決める、陣に入ったら呼び出した相手のところに飛ばされるしかないぞ。」

下を見れば、俺とクローネの足元に、円と複雑な文様で作られた魔法陣ができている。あわてて移動しても一緒についてくる。諦めるしかないか。クローネと一緒になら大抵のことは何とかなる。

「どこに飛ばされるかな？」

「私を知るわけない」

そこで俺の意識は途絶え、誰とも知れぬ術者の元へ飛ばされた。

1話 物語の始まりは、（後書き）

初長編です。一体どれだけの頻度で更新できるか分かりませんが、興味のある人は気長に待っていてください。

読み返して気づいたけど主人公の名前が出てない……。このまま出さずに行くのも面白いかな？

2話 呼び出された先は、

軽い眩暈めまいと共に、途絶えていた意識が手元に返ってくる。転移魔法で移動したときお馴染みの反応だ。移動時間はゼロに等しいが、体感時間はかなり長く、まだ魔力空間の中にいる。移動しているときのコツはただ魔法に身を任せ、目を瞑ったまま待つこと。目を開けてしまうと、視界一面が遠近法の狂った無数の魔法陣に覆われてまた気分が悪くなる。

少しだけ待つて転移終了。出口側の魔法陣に現れた時、しっかりと足で地面を掴んでふらつかないようにする。よし、完璧。

ゆっくり目を開けて状況確認。まずは…クローネも一緒にいる。一番の心配は解消。場所は石造りのさほど大きくはない部屋。何かの神殿か？部屋にいるのは女性一人で、この人が転移魔法の術者ということだろう。金色のふわふわした髪に、大陸全土でよく見る神官服。年齢は俺より2、3歳上くらいか。20歳くらい。少し眠そうな顔はたぶん疲労のせいだ。相手の許可を得ない転移魔法で強制的に呼び出すには、かなりの魔力を必要とする。部屋にいるのは俺クローネ、術者の3人のみ。

「ええと、聞きたいのは3つ。ここはどこ？君は誰？何のために呼び出した？」

「ああ、神様。突然お呼び出しして申し訳ありません。えっと、まずここは〜」

髪だけでなく話し方もふわふわしてるな。…ん？今こいつ神様と言ったか？しっかり俺のほうを見てたからクローネのことではない

よな。

「待て待て、よく見る。俺はどこからどう見ても人間だろう。鉾山街でありふれた人間の夫婦から生まれてドワーフに囲まれて育った人間だぞ？」

正確に言えば全くの外れではないが、神の助けを必要としているらしいこいつの役には立てないだろう。

「でも神気を感じますよ？神気を纏うのは神様だけですよ？神様にこの国を助けて頂きたくて召喚致しました。ちゃんと供物もご用意していますよ。」

ふわふわしてる割に神官の能力はしっかり持ってやがる。中途半端に神気なんて持つてるから完全に誤解されてる。どうやって断ろうか。

「助けてやろうではないか。私とご主人の全力を持って。」

…っ！！なに言ってくれてんのロリ娘がああ！！

「さすが神様、頼りになります。」

「俺は助けるなんて一言も」

「ご主人、この件には戦の匂いがする。久々に思い切り暴れたい。だから…だめ、かな…？」

……………。

グラツときた。セリフの前半は物騒だが、上目遣いに潤んだ瞳で

見つめてくるクローネは俺の心を揺さ振る。だが俺は屈しない！出来ないことを引き受けるのは相手に対して最大の裏切りだ。

「ついでに、強制転移魔法を使う程の術者からの依頼だ。報酬も期待出来るだろう？それに、不可能を乗り越えるご主人の姿は格好いいに決まっている。惚れてしまつかもしれないな。」

「引き受けましょう。」

クローネと一緒にならなんでもできるさ。なぜこんな簡単なことに気づかなかったのか。

「で、助けることだけは決めただけど、詳しい話は全然聞いてなかったな。最初の質問の答えお願い。」

「はい。まず場所は聖都エスクードの神殿です。オリュンポス山の、エスクードで一番大きな神殿ですよ。」

エスクードって隣国じゃねえか。神を呼び出す魔法陣まで用意して隣か。確かにこの世界で神に該当するのは俺ぐらいだが、ものすごく魔力を無駄遣いしてるな。

「次は私のことですね。見ての通りエスクードの神官で、名前はフローリンと言います。お呼びした理由はさっきも言いましたが、エスクードを助けていただきたくお呼びいたしました。詳しいお話は神官長がいたしますのでご案内します。」

エスクードが神を呼び出すほどの事態ってなんだ？政治的にも立地的にも問題があるとは聞いたことないが。エスクードは小国で、帝国ディナールと国境を接しているが、宗教的聖地であるオリュン

ポス山を領地内に内包しているため武力干渉を受けたことはない。立地的には河川が多いが、その分治水には力を入れている。はて、ほんとに何かあるんだ？というか神を呼び出すほどの事態なのに、俺で助けられるのか？

考えても仕方がない。今はフローリンの後ろについていく。

「あ、もう一度言うけど俺は人間だからな。」

「おお、我等の願いを聞き入れていただけましたか。」

案内された部屋で待っていた神官長はかなりご年配のお爺さんだった。今にも寿命で天に召されそうな感じ。老人は敬わないと罪悪感が俺の胸をつついてくる。神のほうが上のはずなのに。フローリンは俺たちを案内した後すぐに出て行ってしまった。

「ふむ、肉体は完全な人間ですな。何かの事情で人に転生しておられるのでしょうか。そちらのお嬢さんは従者の方ですか。人でも神でもなく、神気によって動いていますな。」

さすがに神官長ともなると鋭い。

「そんなところです。神気を持っていても人間ですので出来る事に限りはありますが、全力を尽くします。この国では何が起きているのでしょうか？」

「今、この国は魔物の襲撃にさらされております。もちろん、今ま

でも魔物の襲撃はありましたが、今は厄介なことになっておりまして。魔物に知能などあるはずがないのに、奴らは巧みな連携で兵士たちに対抗しておるのです。エスクードは聖都であり、周辺諸国からの武力干渉がなかったために兵士が少ないことも原因となっております。単体の魔物なら少ない兵でも後れを取ることにはなかったのですが…。」

「確かに魔物が連携する話など聞いたこともありませんが…。それなら兵力を増やせばいいのでは？兵士を訓練するには時間がかかりますが、他国に援軍を要請することもできるでしょう。魔物は人に害を与える共通の敵ですし、それが連携を取るといふ現象が起きたのなら知らぬ顔も出来ないはず。援軍を要請しない理由はないと思いますか？」

「援軍の要請は既に周辺国に出しております。しかし、断られました。最初に帝国ディナールから拒否の答えを返されました。近年ディナールでは兵力の増強を始めており、周辺の小国はディナールに目をつけられることを恐れて、全てディナールと同じく、援軍要請を拒否したのです。」

帝国ディナールが兵力増強してることは知らなかったな。長く内政重視の方針だったから警戒していなかった。俺の故郷は大丈夫か？

「そうですね…。この国だけで対処しなければなりませんね。ディナールの動きは気になりますが、今は当面の問題である魔物に対処しましょう。まずは私たち二人だけで、魔物の連携がどういうものか確認いたします。対処法はそのあとで考えましょう。」

「任せきりで申し訳ありませんな。宜しく願います。」

まずは問題を把握しなきゃ対策も立てられない。地上にいる魔物ならクローネが押されることもないだろうから、敵の連携がどんなものか見て来よう。あ、確認することがあったんだ。

「神官長殿、二つ確認することが。まず、フローリングが供物を用意していると言っていました。それは一体？」

「ええ、神様に助力を願うのですから、魔力の強い娘を一人用意しております。」

「ああ、今は人間だから命は必要ありません。贅は取りやめてください。それと確認のもう一点、人間用の報酬を用意していただきたいのですが。」

「助かります。実を言えば、私も人の命が消えるのは寂しいものなので。では、報酬の方は人間の流儀に合わせて、この国を救っていただいた場合、国庫から十分な謝礼をいたしましょう。」

「やっぱり人身御供だったか。神が力を振るうには必要だが、俺には何の効果もないからな。報酬の方もこれで問題なし。この国を救った後で、というのは人間の体だと完全には信用できないからか？その判断は間違っていない。俺も救える確証がない以上、失敗した時の言い訳ができたみたいで少し気が楽になった。格好悪いな。」

神殿を出て、街の出口までは一人の兵士が案内してくれた。街の外は俺たちだけで行くからそこで別れる。クローネと二人になって、

「クローネ、ずっと静かだったな。」

「ご主人以外と話すのは慣れてない。それに話が難しくてよくわからなかった。結局何をすればいい？」

うん、やっぱりクローネはかわいい。

「クローネの出番だよ。魔物が連携を取るらしい。それがどんなものか、戦って調べてほしい。」

「了解した。魔物の連携か。楽しくなりそうだな。」

クローネはかわいいだけじゃなくて頼りになる。一緒にいてくれて本当に助かる。

2話 呼び出された先は、（後書き）

今回は全編会話になってしまいました。

主人公を物語に首を突っ込む理由が弱いかな。きつとクローネへのあふれる愛はバカという形に変換されるのでしょうか。

プロット作り込んでおかないと、こんなグダグダになっちゃいますね。なぜプロットが重要視されるのか書いてみて分かりました。

1話のあとがきで主人公の名前を出さないで行こうとか書いてましたが、無理です。思いつきでどうこうなるものじゃないよ。神官長とも名乗りすらしてないし。

3話 街の外で会ったのは、

一般に魔物と呼ばれているものは、正確には魔法生命体に属する。大気中に存在する魔力が凝縮して一つの姿を持ったもの全般のことだ。その中で、人に危害を加えるのものを魔物と呼んでいる。

魔力が存在するのは大気中だけではない。普通の動植物にも魔力は少しずつ浸透している。動植物の体内に浸透し、個人差はあるが、蓄えられた魔力は食物連鎖の頂点に近づくほど、総量を増していく。特に魔術的性の高い者は多くの魔力を体内に蓄積することができる。

そして、魔物は生命体としての本能に従って行動する。最も強い本能は食事をすること。魔法生命体のエネルギー源は魔力であり、大気中に存在する魔力以上のものを得るため方法が食事である。当然、魔力を多く持っているものを狙う。

つまり、狙われるのは、食物連鎖の上位に立ち、個体数が多く、低い戦闘力しか持たずに、濃い魔力を持っている、人間。

「だああああああっつつ、来るな！！戦闘はクローネの役目だ！！」

ただ今、【魔物に関する基礎知識】の正しさを俺の身をもって確認中でございます。俺に向かってくる魔物はワীগ。クローネがほとんどを引きつけてくれたが、2体が俺に向かって来る。姿は少し大きめの狼と言ったところだが、鮮やかな青い毛並みは普通の狼では見る事は出来ない、魔物独自のものだ。見た目は狼でも、普通は

群れを作らず単独行動するのが魔物のはずだったが。

ワীগ程度なら俺でも負けることはないが、戦闘はクローネに任せて、俺は外から客観的に観察する予定だったんだけどな。自分の方に向かってきた分は自分で片付けるか。

まず一体が飛びかかってくるが、剣のほうがりーチが長いから、爪と牙が届くより前に攻撃できる。

落ち着け。勝負は一瞬。重要なのはタイミング。剣を構え、ワীগが間合いに入った瞬間、額に狙い澄ました突きを放つ。回避つ、大きく横に飛ぶ。

攻撃の直前、視界の奥に見えた。2体目のワীগが一呼吸の待機をしてからの攻撃準備。時間差をつけての波状攻撃か。単純だが効果的な作戦だ。2体だから回避できたが、さらに多く連続で来たら避けた先まで攻撃範囲に入っていたらどうだろう。受けに回ったら不利になるな。まずは一気に攻めて頭数を減らそう。一体になれば連携も気にせず、普段通りの対応で勝負できる。

仕切り直し。相手も少し距離を置いて様子を見ている。連携が失敗して躊躇しているのか。チャンス。

一気に踏み込んでワীগの目の前に移動。当然、急に近付かれたワীগは距離を取る。だが狙いはコイツではない。一体に攻撃する素振りを見せたことで、もう一体に対しては隙を見せる事になる。狙い通り飛びかかってきた。攻撃されると想定していれば不意打ちを破るのは簡単だ。振り向くと同時に剣を振り下ろし、ワীগの首を落とす。

一体終了。後は簡単だ。ワীগは俊敏だから、追いかけるよりは待ち受けた方がいい。相手が飛びかかってきたところで、今度こそ額に突きを繰り出す。

これで自分の方の戦闘は終了。クローネの方も終わったみたいだ。

「クローネ！そっちはどうだった？」

5体のワグを相手取っていたクローネを呼ぶと、とたとた駆け寄ってくる。くう、全てが可愛いな。

「すごいぞ。簡単な連携を使っただけなのに、こんなに変わるとは思っただけなかった。初めは不意打ちで現れたな。茂みに隠れて側面から襲ってきた。近づいてくるときも、順番に時間差をつけていたな。その次は挟み撃ちだ。全てが視界に入らないように散らばって、死角から襲ってきた。これなら苦戦しても不思議ではないな。」

使っていたのはどれも基本的な戦術だけだが、それでも普通の動物より一個体が強い魔物だからこそ苦戦を強いられているのだろう。この一帯の魔物だけが急に進化したとは考えられないから、外的要因だと思うが、何があるだろうか。魔物の動きを操る魔法なんてあったか？

「……ご主人、誰かいるぞ。」

クローネが顎で示す方向の茂みの中、誰かが木陰に隠れているようだ。よく見ればすぐに見つかる。黒いローブに黒いフード。どんな人物かは分からない。体格はかなり小柄で、まるで子供のようにだ。だが、はつきりとわかることは、

「…怪しい。」

思わず口から出てしまった。ここは街道からだいぶ離れているから、一般人ではないだろう。そもそも正常な一般人はあんな格好しない。エスクードが俺達に監視を付けたか？いや、いくらエスクードが兵士不足だと言っても、さすがにこんな素人は使わないだろう。考えても分からないなら、本人に聞くのが一番早い。

「クローネ。どんな奴か分からないけど、捕まえられる？」

「ご主人の命令とあらば。」

移動は一瞬。見慣れている俺でも、目で追うのがやっと、というほどの速度。突然目の前にクローネが現れたから、相手の黒ローブはかなり驚いている。クローネは少し得意そうな表情をしてる。黒ローブは動かない。というより驚きで動けないようだ。本当に戦闘に関しては素人だな。動きがないからクローネも対応に困っている。

「ん…動くなっ！」

元々動いてないが。クローネは手荒なことはしないことにしたらしい。俺もクローネの元へ向かう。

とりあえず黒フードをはずして顔を確認。子供だな。背丈はクローネとほとんど変わらない男の子。見た目の年齢も同じくらいか。

「さて、少年。ここで何をしていたか答えてもらおうか。」

「…召喚されたのがどんな神様なのか確認しに。」

俺たちが召喚された話はもう広がっているのか。贄を用意してまで召喚したんだから当たり前か。それより少年の声が、何かをこらえるかのように強張っていたことが気になる。

「姉ちゃんを生贄にする神様がどんな奴か、見に来たんだよ。」

「あ、贄はいらないぞ」

「え…?」

神相手に出来る事はなくても行動するとは、なかなか姉思いの良い少年じゃないか。

弟が、贄が取り止めになったことを知らないということは、他の人たちにも贄を取らないことはまだ広がってないだろう。召喚されたのが人間というのは、あり得ないはずのイレギュラーだから、神殿もどうやって公表するか決断できてないみたいだ。

「神気は持つてるから召喚されたけど、人間だからな。贄は必要ない。この国は全力で救ってやるから安心しろ。」

「あ、ああ。そうか…?」

予想外の言葉に対応できないでいる。ふ、子供だな。とりあえず危害を加えようとする様子もないから問題ないか。ワグが連携を使っていることは確認できたが、何が原因かは見当もつかない。今は街に帰って次の行動を考えようかな。

「クローネ、ひとまず街に帰」

「下がれ！」

クローネの声に、後ろに飛んで伏せる。一瞬でも考えて行動が止まれば警告の意味がない。

ワグだ。1匹隠れていたらしい。奴の狙いは 動けない少年声も出せずに自分に飛びかかってくるワグを見つめている。その目の前にクローネが立ちふさがる。一刀両断。クローネが相手ならワグの不意打ちも簡単に阻止できる。

「一体残っていたか。不覚。」

格好つけてるクローネも、凜々しいのに可愛い。少年のほうは今更になって尻餅をついて、クローネを見つめている。格好悪い。立ち上がるのに手を差し出すクローネは優しいな。少年はその手を取るのにも少し震えている。

…？

今の少年の状況を整理してみようか。

? ワグの不意打ちを、クローネの圧倒的な剣技で助けられる。

? 助けられたクローネの顔をぼうつと見つめている。

? クローネの手を取ることを少し躊躇して震えている。

? そのクローネはものすごい美少女だ これ重要

…惚れてるよな。顔も少し赤くなってるし。

少年とクローネの間に割って入る。あくまで自然に見えるように。

「少年。けがはないかな？」

「ああ、大丈夫。ありがとう。」

返事も俺を無視してクローネに向かって言ったな。クローネにつく悪い虫は追い払わないと。

「とりあえず街に戻るぞ。」

俺は街に着くまでずっと、クローネと少年の間に入って歩いていった。

3話 街の外で会ったのは、（後書き）

戦闘シーンって難しいのね…

4話 贅になるはずだった少女は、

聖都エスクードの神殿に戻って、最初に出迎えたのは、俺たちを召喚したフローリンだった。

「お疲れ様です、神様。敵情視察に行ってきたらしいですね。何かわかりましたか？」

「いや、全く。魔物の連携を確認しただけで、まだ何も分かってない。ゆつくり調べるさ。それと俺、神じゃなくて人間だからな？」

神官長も俺が人間だってことは理解してるし、神の奇跡みたいに一瞬で解決しなくても大丈夫だろう。

「あらあら？ユーロも一緒ですね。さっそく神様と仲良くなったですね。」

少年はユーロって名前なのか。そういや街への帰り道でも名前聞いてなかったな。クローネに近づかないように、ずっと牽制けんせいしてたから他に気が回らなくて当然か。

「二人とも知り合いだったのか。……ユーロ？どうした、知り合いなら俺の後ろに隠れる事もないだろ。」

「何か悪いことでもしましたか？悪い子にはお仕置きですよ。」

フローリンのお仕置きと聞いても、全然怖そうな気がしない。会って短い時間だが、常に笑顔を絶やさないので優しそうなイメージ100%だ。

街の外に出ることは普通の人間にはかなり危険だから、出ないように普段から言われてるんだろう。言いつけを守らないのは悪いことだが、姉のためを思ってるの行動だから情状酌量の余地はあるはず（前提として何もできないのは目をつぶる）。

「あー、ユーロはちょっと待ちの外に出ただけだな。俺の召喚で誓にされる姉を思ったら自分を抑えられなくなった結果なんだよ。あまり、怒らないで、くれるかな……。」

俺が話してる途中からフローリンの目が冷たくなっていった。なのに笑みは絶やさない。これって結構怖いな。

「街の外で、ワグと戦う私とご主人のことを観察していたぞ。その後この少年はワグに襲われたが、私が助けてやったのだ。」

クローネ、空気を読んでくれ。街の外に出た上に魔物に襲われたとあっては、言いつけを守らなかったことが際立って悪く見える。ユーロを守ったことを、偉そうに自慢するクローネも可愛いけどな。

「ユーロくん？街の外に出たんですね。外は危ないから駄目っていつも言ってますよね？」

目も声も冷たくなってるのに、まだ笑みは変わらない。フローリン怖いよ。笑顔の威圧感がすさまじい。ゆっくり一歩ずつ俺（の後ろに隠れたユーロ）に近づいてくる。

「……ユーロ、すまん。」

一歩横に動く。そんな裏切り者を見る目をしないでくれ。怖かったんだ。

フローリンは足を止めずにユーロに近づいて……抱き締めた。

「危険なこととはしないでください。たった一つの命は、一人だけの命ではないんです……よ。」

「……ごめん、姉ちゃん。もう出ないよ。」

突然の感動劇。素晴らしい姉弟愛。泣けてくる。心配だから力が入っちゃうんだよな。クローネはもう少し関心を持って。あまりにも平然としてるから、俺の方がおかしいのかと思ってしまう。

「でも、後でお仕置きですからね。」

「……」

ユーロが青くなってる。フローリンのお仕置きってなんだ。

ユーロがフローリンの弟。と、いうことは。

「なあ、神を召喚するとき、贄にされる予定だったのってフローリンだったのか？」

「はい、そうですよ。生まれつき魔力に恵まれてて、神殿だと結構有名なんですよ。」

返事をするときも、まだユーロを抱きしめたままだ。ユーロの頭

が、フローリンの胸に埋もれている。意外と大きいんだな……。ユ
ーロがもがき始めてるが、しっかり抱きしめたまま離してくれそう
になさそうだ。うらやましいとは思わない。兄弟同士だし。俺には
クローネがいるしっ。

「…フローリンは強いな。贄にされるのに、俺たちを召喚した時も
そんな素振り見せなかつたよな。」

「私が贄になれば、皆が助かりますから、悲しむようなことじ
やないんですよ。」

「そうか。」

それが本音なのか、建前なのかは分からない。でも、心から信じ
て後悔していないのも、あるいは、自分の弱さを必要ないところで
見せないのも、心が強いから出来るんだろう。あまり考えてると自
分が恥ずかしくなってくる。俺は弱いからな、心も。

「あー、神官長はどうしてる？時間があれば、対策を相談したいん
だけど。」

とりあえず話を変える。神官長と話したいのも事実だし。

「えーとですね、神官長は会議中です。神様を召喚したのに現
れたのは人間を名乗っていて、だけど神気を持っているなんて前
代未聞ですから、神様と人間のどちらの対応をするか神殿の人た
ちと話し合ってます。」

なんか迷惑かけてるみたいだな。召喚したのは向こうの都合だか
ら、俺が悪いわけじゃないはずだけど。

それより、もうユーロを離してやってもいいんじゃないか？既に身動きしていない。苦しそんでも、俺からは助けてやらないが。別にうらやましいわけじゃない、と自分に言い聞かせる。

……フローリンとユーロが抱きあっているのを見てたクローネが、俺の手を取って腕を組んできた。内心すごくうれしい。けど表に出すのはなんか恥ずかしいから表情は変えない。でもやっぱいうれしいからクローネの頭をついなでてしまう。それにも嫌がる素振りを見せないから、またうれしくなってしまう。クローネ可愛い。

「神官長がいらないなら、どうしようか。……俺たち、エスクードの事はよく知らないんだよな。フローリン、この神殿だけでもいいから、案内してくれる人いないかな？」

「神殿なら私が案内いたしますよ。ユーロを助けていただいたお礼もありますし、ぜひ私に案内させてください。」

「知ってる人だと気が楽だな。案内頼む。」

「はい、お任せください。」

4話 贅になるはずだった少女は、（後書き）

また全編会話…。僕って進歩してないな。

主人公の名前がまだ出てない。出さないで行くのは諦めたのに、最初のタイミング外したからなんか入れにくい。失敗したな。

5話 神殿の祭壇室では、

フロアリンに神殿の案内をしてもらった。が、思ったりかかる時間には少なかった。

防壁は一度街の外に出るときに見た。防壁に囲まれているのはよく見るが、高さは10メートルを超えている。ところどころ低いのは攻撃用の立ち位置だろう。射撃兵器設置する土台も見える。逆に高くなっているところは壁と屋根があつて、長時間の見張りに耐えられそうだ。要塞顔負けの防備を持つてる。

神殿本体の壁も、石造りで数メートルの厚さがある。防壁のため壁に厚みを取っている分、神殿の内部空間は狭くなる。その中で大きな面積を占めている部屋は会議に使われているから入れない。武器庫も兵士でないと入れないらしい。牢獄は今も誰も入っていないし、神官のフロアリンでは案内するほどの知識はない。調理場や倉庫なんて案内する場所ではないだろう。小部屋は個人用だったり、部屋自体に魔法が掛けられているせいで勝手に入れない。

で、残りは一か所だけ。

「はい、ここが最後です。重要だけど数えるほどしか使われない祭壇室です。」

案内されたのは神殿地下のホールだ。地下と言っても上部は地上に出ている、柔らかな日の光が差し込んでくる。ここで舞踏会を開けそうなほど広い。壁際には様々な神の彫像が置かれていて、部屋の中央を見つめている。ホールの向こう側は一段高くなっている。あそこが祭壇だろう。一番眼を引くのは向こうの壁の大部分を占め

ている巨大なモニターだ。もう作動はしないだろうが、機代か神代のものでこれほど大きいのが残っているのは珍しい。近くで見たい、けどモニターだと近くで見てもあんまり変わらないかな。

「ここは神様に供物を奉げる場所です、私もここで贄になる予定だったんですよ。」

「良かったよな、贄にならなくて。俺たちが召喚されたのはもっと小さい部屋だったな。ここは使えなかったのか？」

まあ、召喚された時、この祭壇室に人があふれてたら、それはそれで説明が大変だろうから、使わない方がありがたいが。

「あそこは召喚専用の部屋です、召喚補助の魔法を圧縮して部屋に施してあるんです。どこにいるかもわからない神様を探知したり、規格外の力を持つ神様と魔法でつながるので術者が耐えられるようにしたり、たくさんの魔法が掛けてあるんですよ。」

昔はこの祭壇室で、神様の召喚や会話の魔法を行っていたんですが、人代に入ってからはこちらで準備して強引に呼び出すので、強力な魔力支援が必要になったんです。それから召喚は専用の部屋ですようになったんですよ。」

「元々は召喚した後、ここで贄を捧げて神様に助けてもらう予定だったのか。」

召喚されたのが微妙な存在なせいで、手間と迷惑かけまくってるな。

「私が贄になって一件落着く、のはずだったんですけどね。召喚室も魔力が充填されるまで使えませんから、次々に召喚すること

ができないんです。だからしっかり助てくださいね。」

「やっぱりこの国の危機は俺の手腕にかかっているのか。頑張んなきゃなあ。」

そついや報酬のことも細かく決めなきゃな。国からの依頼だから満足できる額はもらえるだろう。あの時は神とか魔物とかいろいろ言われてあんまり冷静じゃなかったかな。報酬をもらえるほど、期待に応えられるかは分からないが……。

クローネが服の袖を引つ張って来て、

「ご主人なら大丈夫だ。国なんて簡単に救える。私も全力を尽くす心配することなんかないぞ。」

クローネが励ましてくれる。これってすごく力になる。

「頼りにしてるよ、クローネ。元気が出てきた。僕も全力を尽くすよ。」

クローネの頭をなでてやる。猫みたいに目を細めて嬉しそうにしてくれる。俺たちの様子を見てるユーロの表情は何だろう。ライバル心か？なんか、見てると優越感に浸れる。クローネはそう簡単には渡さないぜ。

「なあ、フローリン、あのモニターって神代のものなのか？」

「あれは神代の終わりごろのものだと聞いています。昔はあのモ

ニターを使つて神様と話してたらしいですよ。相手側からも、この祭壇室と交信しようという意思がないと使えないので、人代に入ってから使うのは不可能じゃないかと言われてます。」

神代の末期か。機代の機械技術と神代の魔術が融合して、最も人間が繁栄してた頃だな。もう少し近くで見ようとしてホールの中央まで歩いたあたりで、……何か感じたような。

「クローネ、何か感じないか？魔力に似てるけど違うよな。神力でもない。」

俺よりもクローネの方が、魔力も神力も感知能力は高い。

「魔力をベースに、神力に近づけるように加工したみたいな力だ。ご主人から感じるぞ？」

俺からか？出所を慎重にたどると……バグの中か。バグ自体に空間圧縮の魔法が掛けられてるから、その魔力にまぎれて感じにくかった。バグを覗きこんで最初に目に飛び込んだのは、ケルベロスの三ツ首。びっくりした。召喚される直前に倒した奴だ。換金するの忘れてた。

改めて、バグの中を探る。謎の力の発生源は、底に落ちていた扇だ。これも召喚される直前に入れたもの。

「こいつか。力が強くなってる。」

ただ冷たい風が出るだけだと思ってたが、ただの魔法具じゃなかったみたいだ。危ないかすら分らないが、とりあえず床に置いて少し離れる。

「何を感じるんですか？私は何も感じませんが。」

「フローリンは感じないか。この世界の力じゃないのか？俺もよく分からないけど、危ないものだったらやばいから少し離れてよう。」

突然、謎の力は放出された。向かう先はモニター。今は使えないはずのモニターに、光が灯った。

6話 扇の持ち主は、

「お？おお？つながった！？適当にやっただけなのに！？」

喧しい奴が出てきたなあ。五秒で話すのが面倒な奴だとわかった。オーバリアクションが目障りだ。見た目の年齢の割に印象はかなり若い。

モニターに現れたのは、三十代くらいの男性の上半身。不思議な服を着てる。民族的？な印象を受ける服装だ。

古代遺産と言っても過言ではない巨大モニターが作動したんだから、俺としては興味をひかれてもいいはずなのに、なんか気をそがれた。

「やほー。懐かしい気配を感じて交信してみたんだけどさあ、それかな？その扇。見せてー。もっと良く見せてー。」

「わかったから、見せてやるから顔を離せ。モニターに目と鼻しか映ってないぞ。」

扇は、と。手に取るうとしたところで、

「こちらですね〜。どうぞゆっくり見てください〜。ところで、あなたも神様ですか〜？」

横からフローリンにかっさらわれた。神との交信に使うモニターに現れたんだから、興味を持つのは当然か。元々は神を召喚しようとしてたしな。

「僕は神様じゃないよー。ただの仙人。西に旅した時、神様にあっ

たと事はあるけどね。んー、やっぱりこれだー。五火神焰扇。」

あの扇、なんかすごい名前を持ってた。しかも元々異世界にあったものらしい。結構な掘り出し物だ。

「フローリン、そんなに落ち込むなよ。召喚されて承諾したんだから、俺に任せておけて。」

神かもしれない期待を裏切られて、膝を抱えて座り込んでしまったフローリン。肩に手を置いてなくさめるが、

「……はあ〜。」

俺をちらりと見て盛大な溜息。そんなに信用ないのか俺って。まだ何も成果出してないから仕方ないんだけどさ。ちよつと傷つくぞ。

「で、仙人。この扇ってどんなもの？元々そっちの世界のものだったのか？」

「仙人なんて呼ばないでよー。仙人だけどさ、楊任ようにんって名前があるんだから。その扇は僕が持ってたやつなんだけどね、いつの間になくしちゃったの。たぶん太公望ちゃんを助けたときだと思うんだけど。ま、あの時は僕も死ぬかと思ったほどの混乱だったから仕方ないかな。それが回りまわって異世界まで旅しちゃうなんて驚きだよねー。」

でね、その扇は五火神焰扇ごかしんえんせんって名前があるんだけど、言いづらいから皆は勝手に略して呼んでたね。僕のお気に入りはエンセン辺り？

実はその辺の武器よりずっと強いんだよ。煽げば猛火と狂風が巻き起こるの。炎を出して風で操って、一国の軍勢を焼き尽くしたこともあるんだから。すごいでしょー。」

恐ろしい武器だな。扇のくせに。

「でも俺が煽いでも冷たい風が出るだけだったぞ。別物じゃないか？」

「世界が違うと持つてる力の性質も変わるらしいよ。僕の世界だと仙人も西の神様も、エンセンの能力使えてたから、世界が同じじゃないと使えないみたい。ってか、君からも懐かしい気配が。どこかで会った？ううむ……。」

これが使えれば、クローネに守られてばかりじゃなくなるかな。使えないんじゃないけど。

「はっ、思い出したああー！！君、ヘルメス君だよねっ！ほらどっちが足が速いか勝負した楊任だよー！」

ん？前世のヘルメス時代の知り合いか。転生してるから、最後のほうは別として、ヘルメスの記憶はあまり覚えてないんだよな。前世の記憶が残っていると言っても、結局は別人の記憶だから知らないことを思い出すようなものだ。何かきっかけがないと思いつけない。

「勝負した……。あー、出てきそう。ヘルメスの頃、東から妙な旅人が来たことあったな。タラリアを履いて空を飛べないと伝令もまともに果たせないとか、いきなり文句言ってきた……。」

「それぞれ。神様なのに道具を使わないとなんの力もないって、仙人と同じじゃん？何か特別な力でもないかと、ちよっと挑発してみたの。あの頃は若かったなー。」

「その勝負、ヘルメスの方が負けたんだよな。それで賞品としてタラリアを持ってかれた。……あのときって、勝負するときになって急に向かい風が強くなってたな。その割に周りの木とかは全然揺れてなかった。それで楊任の扇って、風を起こせるんだよな？俺は自分の力だけで走って、おまえは扇を使ってたとか、ないよな？」

「……アハハーナニライツテイルノデスカー。」

演技下手すぎ。目は泳いで棒読みで。口笛まで吹き出した。あからさま過ぎる。まあ、あれもヘルメスのころだから俺がどうこう思うところはないけど。

「ご主人は元々あの男と同じ世界にいたのか？」

小首をかしげて尋ねるクローネもかわいい。

「んー、なんていうのかな。元々あっちの世界にヘルメスって神がいてね。だいたい1000年前位に、他のいろんな神と一緒に、こっちの世界に渡ってきたんだよ。ちなみに、その時が神代の始まりね。で、そのヘルメスが転生したのが俺。だから人間の体に神力を持ってるの。」

「向こうの世界の神なら、あの扇も使えるはずじゃないのか？」

む、確かに。向こうの世界で神はあの扇を使えたって言うし、神力自体はヘルメスのものだから使えていいはず。

「あ、そっちの世界の力が混ざってるからじゃないかなー。ヘルメス君の力と一緒に別の力が混ざってるように感じるんだよねー。そ

れを分けられればエンセンも使えるんじゃない？」

やってみるか。魔力と神力を分割して、神力のみを扇に注ぎ込む。こういうのはイメージがあれば大抵何とかなる。……よし、なんか分けられたような感じがしてきた。この感覚を保ったまま扇に意識を集中させる。扇を頭上に掲げ、思い切り振り下ろし

あれ？この扇って一国の軍勢を焼き尽くすほどの猛火と狂風を起すんだよな。ここで使って大丈夫なのか？

そうは思っても振り下ろした手は既に止める事は出来ない。

そして

6話 扇の持ち主は、（後書き）

ちなみに……

楊任は封神演義から出張です。うちの小説では五体満足の爽やか系。僕は封神演義ほとんど知らないです。設定のためググった程度。

タラリアとは、「履く事によって空を飛ぶ事ができる黄金の翼が付いた魔法のサンダル」のことです。（出典：Wikipedia）

お前は黙れ！

さて、お遊びはこれくらいにして、

「フローリン、ユーロ、異世界との交信って重要事項だよな。神殿に伝えた方がいいんじゃないか？」

「あつ、そうですね。結構な重要事項です。神官長を呼んできますね。ユーロ、行きましょう。」

切り替え早いな。この方が楽だからありがたい。フローリンが名残惜しそうなユーロを引きずって階段を上がって行った。

「おまえも、もう落ち着け。」

「ははっ、ごめんごめん。それで、二人を下がらせて何のお話かな？聞かれたくないんでしょ？」

「聞かれたくないっていうか、信じるかさえ分からないような話なんだよな。そのことで確認したいことがある。ヨウニン、最近おまえの言う西の神に会ったか？」

聞きたいのはヨーロッパの神、つまり俺の前世の知り合い達だ。

「……会ってないねえ。割と何度も西には行ってるけど、1000年前に異世界に渡ったと聞いてから一度も。君と一緒に世界にいるんじゃないの？」

予想してたけど、やっぱり戻ってないか。ヨウニンなら全部言ってもいいよな。こつちの世界だと信仰が根付いてるから、どういう反応が返ってくるか怖くて話せないけど、こいつはその心配がないし。

「もう、こつちの世界にもいない。フローリン達に聞かせていいのかわからないのがこの話なんだけどな、こつちの世界に来た神は消滅したよ。そつちの世界に戻った神もいないなら、もう復活することもないだろうな。」

「ご主人、初めて聞く話ばかりだぞ。なんで黙ってた？」

「あ、いや、別に隠してたわけじゃなくてね、クローネは宗教の影響を受けてないから神には興味ないかなーとか思ってたりにしてた訳でね。」

すねた顔のクローネもかわいいけど、意外だな。クローネがこんなに興味持つなんて。いや、神と会ったことはなくても、クローネ自身が神の技術の一端でもあるし、不思議でもないのか？

「むう、ご主人が隠し事など……。」

すねた後はなにか考え込んでる。今日のクローネは何か変な感じだな。

「うわー、みんな消えちゃったの？ ヴィーナスちゃんも？ アフロデイーテちゃんも？ 全世界の損失だよー。いったい何があったのさ！」

「俺にもよく分からないんだが、ほんの20年くらい前、俺の知ら

ない別の世界から侵攻されたいらしい。存在するだけで狂気と邪気を撒き散らす規格外の奴。俺達、神が戦いを挑んだけど敗北し、残った者は逃げようとしたが、結局は全員やられたみたいだな。

神に属するような力を持ってないと知覚さえできない次元の存在。そのおかげで、こつちの世界や動植物自体には影響が少なかったのは幸いだった。」

ヘルメスの記憶だが、残っている記憶としては最も新しいから信用できる。

「怖いねー。その侵攻してきた奴はどうなったの？僕のいる世界にまで侵攻してきたら笑えないから気になるんだけど。」

「あー、それは分からん。奴が侵攻して、その直後に俺は輪廻の渦に巻き込まれたから、詳しいことは分からないんだ。奴の邪気と狂気は感じないから、また別の世界に行ったんだと思ってる。」

「そっかあ。別の世界じゃ調べようもないしなー。……輪廻の渦で転生？ヴィーナスちゃんとアフロディーテちゃんとかも転生してる？」

「それはないと思う。普通、神は転生しないから、輪廻の渦に直接飛びこまないと、転生せずにそのまま消滅するんだよ。」

こいつ、あの二人とそんなに仲が良かったのか？……ただの女好きって方が可能性高いか。

「残念。うう、あの二人とは思い出の中でしか会えないのかあ。」

「神が消滅した話は、こつちの世界の人には話さない方がいいよな。」

影響が大きすぎる。」

「そうだねー。いなくなったものは、どうしようもないし、僕も面倒なことは嫌だから黙ってるよ。あ、ちょうど来たみたいだね。」

振り返ると、神官長を連れてフローリンとユーロがこちらに歩いてくるところだった。ヨウニンと話すことは終わったし、神官長の方でも聞かれない話とかあるだろうし、そろそろお暇しますか。

「じゃあな、ヨウニン。クローネ、行こうか。」

「じゃーねー。また僕と話したくなったら呼んでね、ここならいつでも交信できるような気がするからー。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2315x/>

神なき世界の偽神伝

2011年11月27日00時57分発行